

第2節 未成年者調査結果からみた未成年者の喫煙・飲酒の現状

未成年者調査はインターネット調査で実施したため調査結果については代表性に若干問題を残すが、先行研究でいわれている通り、その調査結果を問題や課題の傾向を把握するために活用することは有効である。そのため、本節では調査結果の回答率（％）は小数点第1位を四捨五入した割合で概ねの傾向をみていくこととする。なお、調査結果の詳細は55ページ以下を参照されたい。

1. 未成年者調査結果からみた未成年者の喫煙の現状

（1）未成年者の喫煙に対する意識や認識

1）喫煙に対する健康意識

年齢があがるほど、「たばこは害ばかりで健康に良い面はない」という意識の割合が低下する。また、健康意識は父親・母親の喫煙状況との関連性がみられる。特に、父親より母親の方が顕著であり、母親が吸っている未成年と吸っていない未成年では「たばこは害ばかりで健康に良い面はない」という意識に1割の差がある。さらに、喫煙する同じ年の友人の有無も影響を与えている（原因と結果については不明であるが相関作用があるであろう）。

2）たばこの害による病気の認知

「肺がん」はほぼすべての未成年者で認知されていたが、他の疾病の認知度はすべて5割未満で、代表的な病気である「心臓病」の認知度も24%であった。年齢や校種があがるほど認知度は高くなるが、有職の男性では認知度が他より低い傾向がみられる。たばこの害による病気の認知度が上がれば当然健康意識にも影響を与えるため、低年齢からの啓発や教育が必要といえよう。

3）喫煙に対する規範意識

健康意識と同様に、年齢があがるほど規範意識が弱くなるが、特に男性では高校以上の年齢層で顕著である。父親・母親の喫煙状況や喫煙する同じ年の友人の有無との関連性がみられるのも同様である。また、たばこは害ばかりで健康に良い面はないという強い意識を持つ未成年では8割が未成年者の喫煙禁止が「当然である」と考えているが、健康に良い面よりも害の方が多い程度の意識の未成年では「当然である」と考える者は約4割に過ぎず、差が大きい。未成年者にたばこの害について十分に認識させることの重要性がわかる。

（2）未成年者の喫煙の現状

1）喫煙経験、30日間の喫煙経験

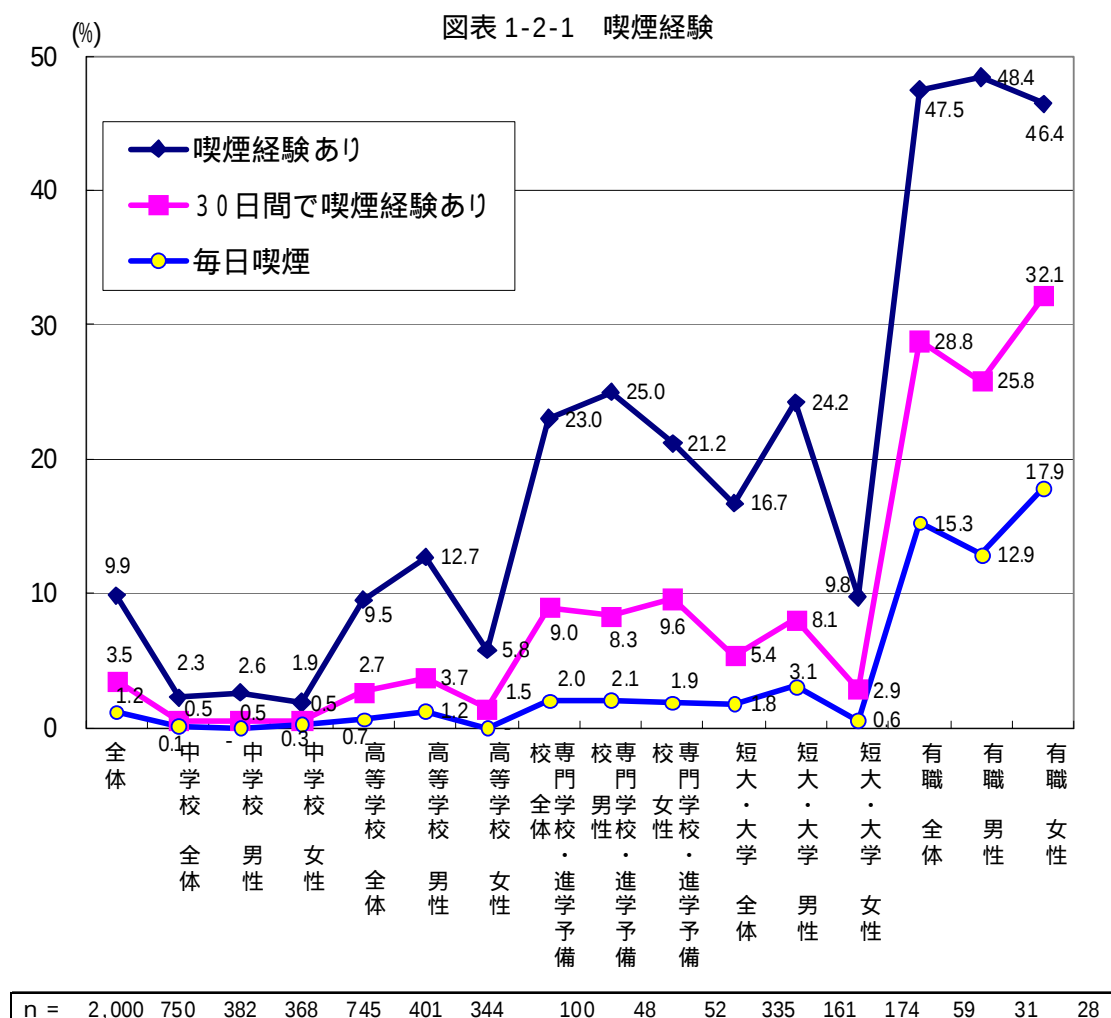
調査に回答した未成年者2,000人のうち喫煙経験ありは9.9%（197人）、30日間で喫

煙経験がある未成年は 3.5% (70 人)、毎日喫煙している未成年は 1.2% (24 人) であった。

年齢や校種があがるほど、喫煙経験が増え、特に男性で顕著である。本調査では、該当数は少ないが仕事をしている未成年者も回答しているためこの層についても触れる。

喫煙経験者は中学生では男女とも 2% 程度 (男性 10 人、女性 7 人) で、30 日間で喫煙経験がある中学生は男女とも 0.5% (男女とも 2 人)、毎日喫煙は男子が 0 人、女子は 0.3% (1 人) であった。高等学校では男子の喫煙経験者は 12.7% (51 人) と急増、女子も 5.8% (20 人) と男子の半分程度に増える。また、30 日間で喫煙経験がある高校生は男子が 3.7% (15 人)、女子が 1.5% (5 人)、毎日喫煙は男子が 1.2% (5 人)、女子は 0.3% (1 人) であった。

専門学校・進学予備校や短大・大学の男性では、喫煙経験者は 4 人に 1 人、30 日間で喫煙経験は 1 割弱、毎日喫煙は 2~3% 程度である。短大・大学の女性は喫煙経験者が約 1 割で、30 日間で喫煙経験は 2.9%、毎日喫煙は 0.6% で高等学校の男子より割合が低い。専門学校・進学予備校の女性は男性の専門学校・進学予備校生に近い。仕事をしている未成年者は喫煙経験者が約半数、30 日間の喫煙経験が約 3 割、毎日喫煙が 15% で、特に高くなっている。また、30 日間の喫煙経験と毎日喫煙は男性より女性の方が高く、女性の 30 日間の喫煙経験は 3 割を超え、毎日喫煙も 2 割に近い。

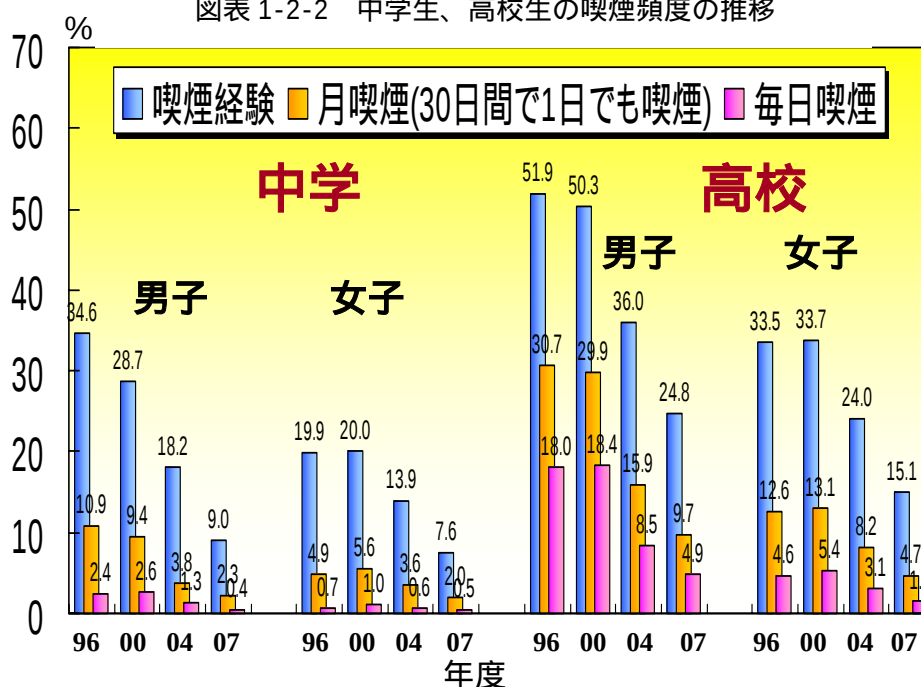


なお、以下で中学生と高校生を対象とした平成 19 年度厚生労働科学研究費補助金「未成年者の喫煙・飲酒状況に関する実態調査研究」の調査結果を参考までに紹介する。経年で喫煙率が減少しているのがわかる。

今回のインターネット調査と調査方法及び質問文^{注)}は異なるが、調査結果を比較すると、特にインターネット調査に回答した高校生は上記調査の高校生より、喫煙経験率が低い結果となっている。

^{注)} 30 日間の喫煙経験（毎日喫煙を含む）を問う質問は同一であるが、喫煙経験を問う質問は若干異なっている。

図表 1-2-2 中学生、高校生の喫煙頻度の推移



< 出典 > 平成 19 年度厚生労働科学研究費補助金「未成年者の喫煙・飲酒状況に関する実態調査研究」 調査名「2007 年度お酒とタバコについての全国調査」

【調査概要】 抽出方法 : 全国から中学校 130 校、高等学校 109 校を無作為抽出
 学校調査協力率 : 中学 89 校 (68.5%) 高校 79 校 (72.5%)
 調査方法 : 無記名自記式質問票による調査を実施
 調査時期 : 平成 19 年 12 月～平成 20 年 2 月
 有効回収数 : 90,039 票

また、「青少年とタバコ等に関する調査研究報告書」（平成 13 年 1 月・総務庁青少年対策本部）（以下、「総務庁平成 12 年度調査」という。調査概要は以下の通り）では中学生と高校生の合計 3,905 人にこの 1 年間の喫煙経験について聞いている。「吸ったことがある」と回答したのは、中学生男子が 10.7%、中学生女子が 6.4%、高校生男子が 24.4%、高校生女子が 12.2%であった。質問文及び調査方法は異なるが、やはり大幅に喫煙経験率が減っているといえよう。

【調査概要】	抽出方法	: 福島県、神奈川県、新潟県、大阪府、香川県、長崎県の 6 府県から公立の中学校、高等学校を各 3 校選定し、各校の 2 学年から 3 クラスを抽出し、クラスに在籍するすべての生徒が調査対象者
	調査方法	: 無記名自記式質問票による調査（教室における一斉調査、無記名で密封回収）
	調査時期	: 平成 12 年 10 月
	有効回収数	: 3,905 票（中学生男子 962 人、中学生女子 875 人、高校生男子 1,192 人、高校生女子 876 人）

2) 初めて喫煙した年齢、喫煙のきっかけ、たばこを吸う理由、30 日間の喫煙量

初めて喫煙した年齢は、「16 歳」、「17 歳」と「18 歳」（同率）の順で、喫煙のきっかけは「好奇心から」（75%）や「友人や仲間のさそい」（56%）が大きな要因である。喫煙経験が急増する高等学校以前の小学校や中学校での啓発・教育の充実が特に重要であるといえる。

たばこを吸う理由は、30 日間喫煙経験者（70 人）では「ストレス発散のため」が 56%（39 人）、「習慣だから」が 31%（22 人）である。うち有職の 28 人では「習慣だから」（46%、13 人）が最も多い理由となっている。また、30 日間の喫煙量は、1 日平均 2 本以上と回答した未成年者が 73%（51 人）を占め、本人が習慣と意識していないが実際には習慣になっている未成年者もいると考えられる。

有職者は年齢としては短大・大学の対象者とほぼ同じであるが、習慣となっている喫煙者の割合が高い。これらの層は今後の学校教育の効果は期待できないので、成人と同様のたばこ対策が重要となろう。

3) 喫煙場所

喫煙場所の第 1 位は「友人の家」（53%）、第 2 位は「自分の家」（42%）である。中学生の 17 人では「路上や公園」（9 人）が最も割合が高い。年齢があがると、居酒屋やカラオケボックス、飲食店などの割合も増える。中学生は自宅では親の目があり「路上や公園」で喫煙していると思われ、近所や地域での見守りが重要であろう。また、「友人の家」や「自分の家」が多く喫煙場所となっていることから、親や保護者が子どもの状況や環境の変化に気を配ることが求められる。

なお、参考までに総務庁平成12年度調査での同種の質問をみると、過去1年間に喫煙経験がある中高生(557人)の喫煙場所は、「公園や路上」(60.5%)、「自分の家」(58.0%)、「友だちの家」(49.9%)の順である。

4) 注意された経験

喫煙経験者のうち親又は保護者から注意された経験がある未成年者は44%、誰からも注意された経験がない未成年者は52%である。好奇心から1~2度喫煙した場合は親が知らない場合も多いと思われるが、短大・大学生でも親や保護者に注意された経験がある者は32%しかおらず、親が黙認しているケースも多いものと思われる。また、30日間に喫煙経験がある70人のうち、親又は保護者から注意された経験がある者は51人(73%)で、残りの19人は注意されていない。毎日(30日)吸っている24人でも親又は保護者から注意されていない者が6人(25%)いる。親が未成年者の喫煙の害をしっかりと理解し、子どもを注意していくことがまず求められる。

なお、前述した総務庁平成12年度調査の同種の質問で、過去1年間に喫煙経験がある中高生(557人)の回答をみると、親から注意されたことが「ある」は36.4%、「ない」が18.1%、「親は知らない」が39.0%であった。

5) たばこの入手場所、1年間に年齢のために買えなかった経験、成人識別自動販売機での購入経験

未成年者のたばこの入手場所は「コンビニエンスストア」(26%)、「友人から」(24%)、「自動販売機」(7%)、「家族から」(4%)、「たばこ屋」(3%)、「スーパー」(2%)の順である。中学生、高校生では友人が第1位であるが、年齢や校種が上がるほどコンビニエンスストアの割合が高くなる。30日間喫煙経験や毎日喫煙の未成年者では3人に2人がコンビニエンスストアで購入している。

この1年間に年齢のために店で買えなかった経験については、たばこを買おうとした未成年者(74人)のうち8割が買えなかった経験は「ない」と回答した。上記のたばこの入手場所の回答から推察すると、たばこ屋やスーパーもゼロではないが、特にコンビニエンスストアでの購入の確率が高いと考えられる。次章で小売店舗調査結果を紹介するが、コンビニエンスストアの取組が特に怠っているともしえない状況である。小売店舗の取組をもってしても8割の未成年者がたばこを購入しようと思えばいつでもできる現在の対面での販売状況には大きな問題があるといえ、今後根本的な対策が必要である。

次に、成人識別自動販売機での購入経験については、購入経験があるのは喫煙経験者のうちの5%(10人)であった。しかし、その中には中学生(2人)や高校生(4人)も含まれていた。顔認証方式での自動販売機の問題点やICカードの貸し借りなどが指摘されており、今後の課題であろう。

参考までに、総務庁平成 12 年度調査の同種の質問をみると、過去 1 年間に喫煙経験がある中高生（557 人）のたばこの入手場所の回答は、「自動販売機」（71.1%）、「友だちからもらう」（39.7%）、「スーパー・コンビニ」（25.7%）、「タバコ屋」（15.4%）の順で、自動販売機からの入手が 7 割に達していた。また、前述の平成 19 年度調査の前に実施された平成 16 年度厚生労働科学研究費補助金「未成年者の喫煙及び飲酒行動に関する全国調査」でも、喫煙経験のある男子高校生の 8 割以上が「自動販売機」から入手していると回答していたことを鑑みると、成人識別自動販売機の導入は未成年者のたばこ購入防止対策として非常に効果があったといえよう。

2. 未成年者調査結果からみた未成年者の飲酒の現状

以下、たばこと同様に未成年者の飲酒の現状についてみていく。なお、調査結果の詳細は 88 ページ以下を参照されたい。

(1) 未成年者の飲酒に対する意識や認識

1) 飲酒に対する健康意識

飲酒では「健康に良い面よりも、害の方が多い」という意識の未成年が全体の 6 割を占めている。年齢が上がるほど飲酒の害の認識が弱くなり、「健康に害があるとは思わない」は短大・大学の男性で約 2 割、専門学校・進学予備校や有職の男性では 4 人に 1 人以上を占める。たばこと比べると健康に悪いという意識は弱く、健康に良い面が多い、又は害がないと思う人は、たばこでは 1%未満であるが、お酒ではほぼ 4 人に 1 人いる。

また、親にお酒をすすめられる経験や、飲酒する同じ年の友人の有無が、本人の飲酒状況に影響を与えている。

2) お酒を飲むことと関係があることの認知

「アルコール依存症」「肝臓が悪くなる」「急性アルコール中毒」の認知は 6 割を超えていたが、「わからない」という未成年者も 1 割以上いる。ほとんどの項目で年齢や校種があるほど認知度は高くなっている。

3) 飲酒に対する規範意識

「当然だと思う」が 51%を占めるが、たばこと比べて割合が低く、「しかたがないことだと思う」はたばこより約 22 ポイント増加している。健康意識と同様に、年齢が上がるほど男女とも規範意識が弱くなる。親にお酒をすすめられる経験や飲酒する同じ年の友人の有無との関連性がみられるのも同様である。また、お酒は害ばかりで健康に良い面はないという意識を持つ未成年では 85%が未成年者の飲酒禁止が「当然である」と考えているが、健康に害はないという意識の未成年では「当然である」と考える者は 24%に過ぎず、差が大きい。このことから、未成年者に飲酒の害について十分に認識させることの重要性がわかる。

(2) 未成年者の飲酒の現状

1) 飲酒経験、30 日間の飲酒経験

調査に回答した未成年者 2,000 人のうち飲酒経験ありは 45.7% (913 人)、30 日間で飲酒経験がある未成年は 20.2% (403 人)、毎日飲酒している未成年はいなかった。喫煙経験と比べると、飲酒経験者が約 36 ポイント高い。

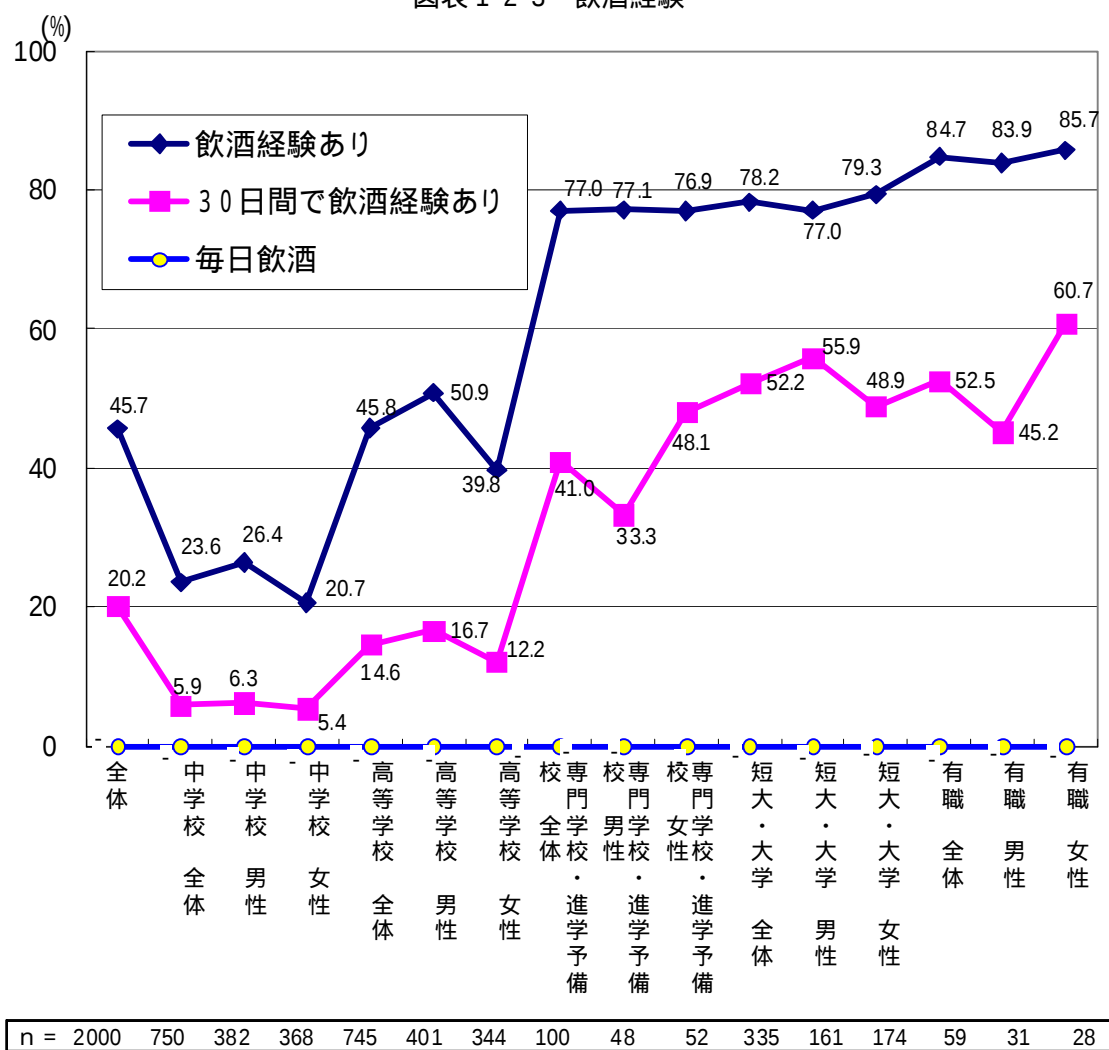
本調査では、該当数は少ないが仕事をしている未成年者も回答しているためこの層についても触れる。

飲酒経験者は中学生では男女とも2割を超える。30日間で飲酒経験がある中学生は男女とも6%前後ではあるが、たばこより高い。高等学校では男子の飲酒経験者は5割に急増、女子も約4割に増える。また、30日間で喫煙経験がある高校生も男子が2割弱、女子が1割強に増える。

専門学校・進学予備校や短大・大学では男女とも飲酒経験者は約8割を占める。有職も男女とも8割半ばと高い。特に、高校では4割であった女子の飲酒経験者は卒業後一気に倍になる。30日間で飲酒経験がある者は、短大・大学では女性より男性の方が割合が高いが、専門学校・進学予備校や有職では男性より女性の割合の方が高く、有職の女性の30日間飲酒経験者は6割を占めている。

高校生では7人に1人が30日間で飲酒経験があり、また、高等学校卒業以上の年齢では、男女とも飲酒が日常化している実態が浮き彫りとなった。大きな社会問題といえよう。

図表 1-2-3 飲酒経験

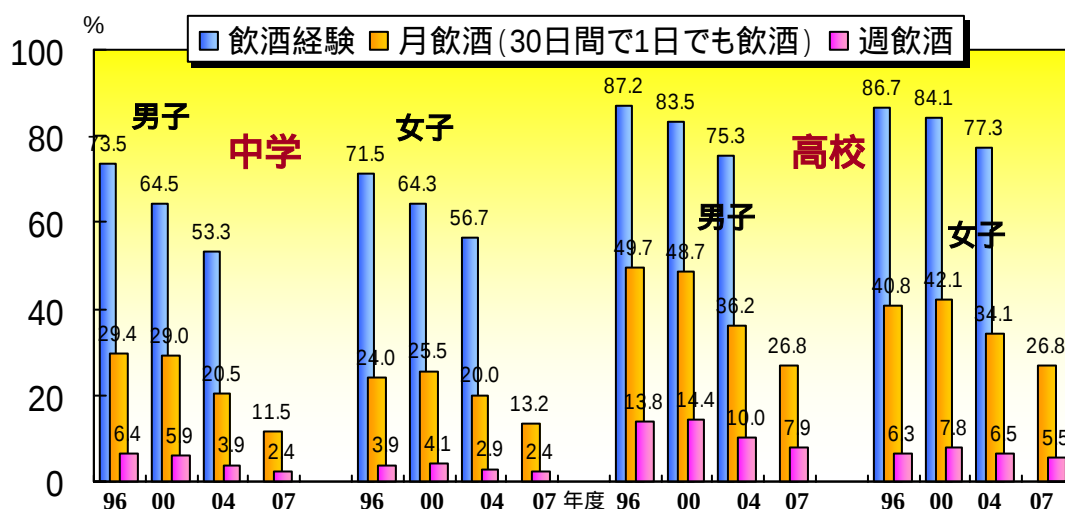


また、前述の中学生と高校生を対象とした平成 19 年度厚生労働科学研究費補助金「未成年者の喫煙・飲酒状況に関する実態調査研究」の調査結果を参考までに紹介すると、下の図の通りである。経年で飲酒経験率や 30 日間の飲酒経験率が減少しているのがわかるが、まだ高い水準にあるといえよう。

なお、調査方法は異なるが、標記調査の月飲酒（30 日間で 1 日も飲酒）の割合で今回のインターネット調査と比較すると^{注）}、インターネット調査に協力した中学生や高校生の 30 日間の飲酒経験率は上記調査のおよそ 2 分の 1 から 3 分の 2 程度である。

^{注）} 30 日間の飲酒経験を問う質問文は同一であるが、本調査では週飲酒を問う質問はしていない。また、厚生労働省調査では平成 19 年度に限り飲酒経験を問う質問を行っていない。なお、厚生労働省調査の飲酒経験を問う質問の質問文は「自分からすすんでまたはお酒とわかって初めてお酒を飲んだのは何歳ごろですか」であり、本調査の質問文とは異なる。

図表1-2-4 中学生、高校生の飲酒頻度の推移



< 出典 > 平成 19 年度厚生労働科学研究費補助金「未成年者の喫煙・飲酒状況に関する実態調査研究」 調査名「2007 年度お酒とタバコについての全国調査」

なお、総務庁平成 12 年度調査では、この 1 年間に「飲んだことがある」と回答したのは、中学生男子が 50.4%、中学生女子が 46.2%、高校生男子が 78.6%、高校生女子が 77.7%であった。質問文及び調査方法は異なるが、今回のインターネット調査結果と比べると、同じく飲酒経験率が減少していることが読み取れる。

2) 初めて飲酒した年齢、飲酒のきっかけ、親がお酒をすすめること、お酒を飲む理由、飲酒量

初めて飲酒した年齢は「18歳」、「10歳以下」、「17歳」の順である。たばこと比べて「10歳以下」の割合が高いことが懸念される。飲酒のきっかけは「好奇心で」(59%)、「友人や仲間のすすめ」(29%)に次いで、「親のすすめ」も17%ある。飲酒経験者は中学生でも約4人に1人を占めており、できるだけ早い段階での啓発・教育の充実が必要であろう。また、中学生の1割以上、高校生の約2割が親にお酒をすすめられることがあると回答している。特に、専門学校・進学予備校や短大・大学、有職などの高等学校卒業以上の未成年者では、親にすすめられる経験がある者は3割以上を占めた。本調査で、親が飲酒のきっかけを作っているだけでなく、“子どもでも少しの飲酒なら問題ない”と親が子どもに飲酒をすすめている実態が浮き彫りとなった。未成年者の飲酒を防止するためには、まず親に対して、飲酒が子どもの身体に及ぼす弊害や、非行の入り口となること等を啓発・教育していくことが不可欠である。

お酒を飲む理由は、「おいしいから」(26%)という積極的な理由が最も割合が高い。また、男性より女性で多く、女性の3割があげている。30日間飲酒経験者では半数近くが「おいしいから」をあげている。口当たりの良い、甘いお酒の種類が増えていることも、女性に飲みやすく「おいしいから」があげられる理由であろう。

飲酒量は、コップに2杯以上の飲酒は短大・大学で3割半ば、有職では4割半ばを占め、成人と変わらない飲酒の実態がみられる。

3) 飲酒場所

飲酒場所は「自分の家」(62%)、「友人の家」(27%)、「スナックや居酒屋など」(22%)の順である。「自分の家」は校種が下がるほど割合が高く、中学校では8割を超える。一方、「友人の家」は校種が上がるほど割合が高く、短大・大学では4割に近い。居酒屋やカラオケボックス、飲食店などは短大・大学や有職で割合が高い。「友人の家」や「自分の家」が多く飲酒場所となっていることから、親や保護者が子どもの状況や環境の変化に気を配ることが求められる。また、特に大学生などの学生が多い地域では、未成年者の飲酒防止のためには飲食や娯楽関係のお店(酒類の提供業者)の協力が必須といえよう。

なお、参考までに総務庁平成12年度調査での同種の質問をみると、過去1年間に飲酒経験がある中高生(2,291人)の飲酒場所の回答は、「自分の家」(76.7%)、「友だちの家」(32.1%)、「スナック・居酒屋等」(12.7%)の順である。

4) 注意された経験

飲酒経験者のうち親又は保護者から注意された経験がある未成年は25%、誰からも注意された経験がない未成年は73%である。たばこと比べると、親又は保護者から注意された

未成年は 2 割近く少ない。また、30 日間に飲酒経験ある 403 人でも、親又は保護者から注意された経験がある者は 3 割に過ぎない。飲酒について容認している親が多いといえよう。まず、親が未成年者の飲酒の害をしっかりと理解し、子どもを注意していくことが必要である。

総務庁平成 12 年度調査の同種の質問では、過去 1 年間に飲酒経験がある中高生（2,291 人）の回答は、親から注意されたことが「ある」中高生は 21.1%、「ない」が 69.1%、「親は知らない」が 8.2%であった。

5) お酒の入手場所、1 年間に年齢のために買えなかった経験

未成年者のお酒の入手場所は、「家にある」(32%)、「店で飲んだ」(20%)、「友人からもらう」(11%)、「コンビニエンスストア」(10%)、「スーパー」(8%)、「自動販売機」(3%)、「酒屋」(2%)である。「家にある」以外は校種が上がるほど割合は高くなっている。短大・大学では、「店で飲んだ」(45%)、「家にある」(26%)、「コンビニエンスストア」(16%)、「スーパー」(15%)の順である。

また、この 1 年間に店でお酒を買おうとした未成年者（206 人）では、94%が買えなかった経験は「ない」としている。たばこと比べるとお酒のほうが約 15 ポイント高く、たばこ以上にお酒は未成年者にとって購入しやすいものとなっている。

いつでも買えている未成年が 94%を占めるのは、まったく規制がなされていないのと同様といえよう。また、お酒の入手場所として自宅以外では「店で飲んだ」の割合が最も高いため、今後は特に居酒屋やカラオケボックス、飲食店などでの年齢確認の徹底が急務である。

なお、前述した総務庁平成 12 年度調査の同種の質問では、過去 1 年間に飲酒経験がある中高生（2,291 人）の回答は、「家にある」(56.3%)、「スーパー・コンビニ」(35.2%)、「酒屋」(18.0%)、「店で飲んだ」(16.6%)、「自動販売機」(10.9%)の順である。今回調査では飲酒経験のある中学・高校生全体で「スーパー」と「コンビニエンスストア」の合計は 9%未満、「酒屋」は 1%にも満たなかった。調査手法が異なるため参考に過ぎないが、平成 12 年度と比べると、中学・高校生に関しては酒屋やコンビニエンスストアのお酒を販売しない体制は改善されていると思われる。